

平成 23 年-24 年度 調査研究報告書

**学校向け文化体験プログラムが、
地域の専門家や実演家へもたらす影響・効果**

平成 25 年 2 月



三重県生涯学習センター

はじめに

「教えることは学ぶこと」、これは教育に限らず多くの場面で実感を持って語られる言葉です。子どもたちの眼前で繰り広げられる「文化体験プログラム」はすべて本物の力を持っています。長い歴史や伝統に育まれてきた日本文化の数々、プロと呼ばれる方々が長年鍛錬して身につけてきた技と力、そして学問の深みと高みに身を置いてきた研究者でしか到達できない知の世界。こうした「本物」は、それだけで子どもたちの感性や知性を揺さぶる力を持っています。一方、こうしたプログラムに、生まれて初めて触れる子どもたちの驚きや感動の、その瞬間に立ち会えるのは指導者冥利に尽きることではないでしょうか。「本物」のプログラムを媒介にして、子どもたちと指導者がつながる時間をプロデュースするのが生涯学習センターの役割だといえます。子どもたちの日常を良く知る先生方と連携して、より効果的な学習プログラムに仕上げなければなりません。

今回の調査研究は通常の教育研究とは趣を異にしています。一般的に教育プログラムの検証は、プログラムを受ける子どもへの効果を調べるのが主眼であるのに対して、今回は提供した専門家、実演家（指導者）への影響を調べるものだからです。体験プログラムを実施する場合、多くは指導者の実演と子どもたちの模倣やトライアルが交互に行われます。つまり、指導者と子どもが双方向的に関わることになり、通常の授業よりも子どもたちの反応が鮮明に現れます。また学校の規模や学級の個性にも強く左右されます。指導者の想定を超える展開もたくさんありますし、予定調和的に進まないことも常です。体験プログラムの実施が指導者にも大きな影響を与える理由と言えるでしょう。専門家・実演家の力量が試される場面もあるでしょうし、子どもたちの驚きや感動は、もしかすると実演家に初心や原点を改めて気付かせるかもしれません。そうだとすると、この「文化体験プログラム」は専門家や実演家の方々にとって、自らの力量をより高いレベルに向かわせる契機となることでしょうか。この事業が専門家と子どもの双方にとって有意義なものとなる鍵もここにあるのではないのでしょうか。

今回の調査では、「文化体験プログラム」を実施していただいた専門家、実演家のご協力を得て、指導者側への影響や効果を調べることができました。また、監修者として三重大学教育学部 山田康彦教授には、本調査の実施方法や分析等で学問的見地から指導や助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

平成 25 年 2 月

三重県生涯学習センター所長

河 原 孝

目 次

I. 調査の目的	1
II. 調査の概要	1
III. 「文化体験パートナーシップ活動推進事業」について	2
1. 平成 23 年度実績	
2. プログラム提供先	
3. プログラムのながれ	
4. プログラム事例	
IV. 調査結果	10
1. 調査対象	
2. 専門家・実演家の活動実績（文化体験パートナーシップ活動推進事業を除く）	
3. プログラムのねらい	
4. プログラムを受けた子どもたちへの影響	
5. プログラムを行うにあたって、工夫している点	
6. プログラムを行って難しかったところや負担に感じた点	
7. 専門家・実演家への影響や変化	
8. 専門家・実演家から見たプログラムを受けた子どもたちの様子	
9. 「文化体験パートナーシップ活動推進事業」への要望	
V. まとめ	22
1. 課題	
2. おわりに	
VI. 監修者のことば	25
VII. 資料	27

平成 23 年－24 年度調査研究報告書
学校向け文化体験プログラムが、地域の専門家や実演家へもたらす影響・効果

平成 25 年 2 月発行

監 修 三重大学教育学部 教授 山田 康彦

編集発行 三重県生涯学習センター

所在地 〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 1234

(三重県総合文化センター内)

TEL 059-233-1151

FAX 059-233-1155

URL <http://www.center-mie.or.jp/manabi/>

I. 調査の目的

「みえの子どもたちに感動体験を」。三重県生涯学習センター（以下：センター）では、三重県内の文化施設の専門家や、県内の実演家と連携して、子どもたちがすぐれた文化・芸術を体験したり、教科書では学ぶことのできない地域の歴史や文化を学んだりする機会づくりに取り組み、子どもたちの創造力やコミュニケーション力の育成をめざしている。

これらの学校における文化体験活動は、学校や子どもたちに有益なだけではなく、地域の専門家や実演家にとっても、例えば、次代の担い手や将来の顧客の育成、地域社会に貢献することによる充足感など、さまざまな効果が予想される。今後、地域社会で文化体験活動を継続的に展開していくためにも、文化体験活動に携わることによって、専門家・実演家が、どのような影響を受けたのか、どこにやりがいを感じ、難しさを感じているのかなどを検証する必要がある。

この調査結果が、分野にかかわらず専門家・実演家が、学校向けに文化・芸術体験プログラムを行う際の共通認識として活用されること、また、文化体験活動の導入を検討している学校、地域で活躍したいと考えている専門家・実演家やボランティア、中間支援を行う機関に有益な資料となることをめざす。

II. 調査の概要

【対象】「文化体験パートナーシップ活動推進事業」においてプログラムを提供している各団体、専門家、実演家、演奏家

【期間】平成24年2月14日～3月28日

【調査方法】郵送による配布・回収

【調査対象数】31件

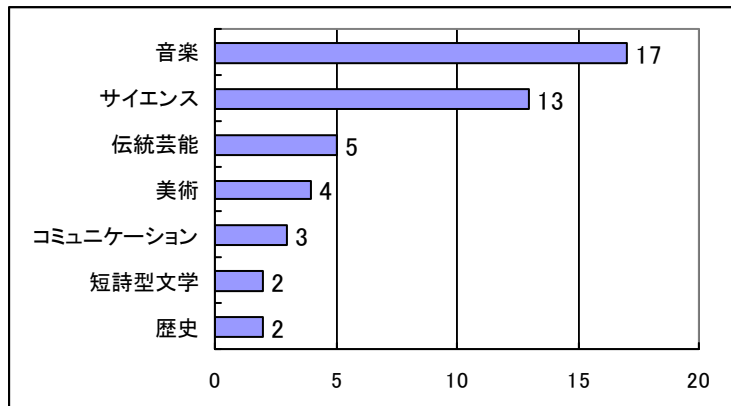
【回収結果】26件（回収率83.9%）

III. 「文化体験パートナーシップ活動推進事業」について

1. 平成23年度実績

平成23年度は、学校向けに、文化体験プログラムをのべ46回実施した。ジャンルごとの実施数は図1のとおり。

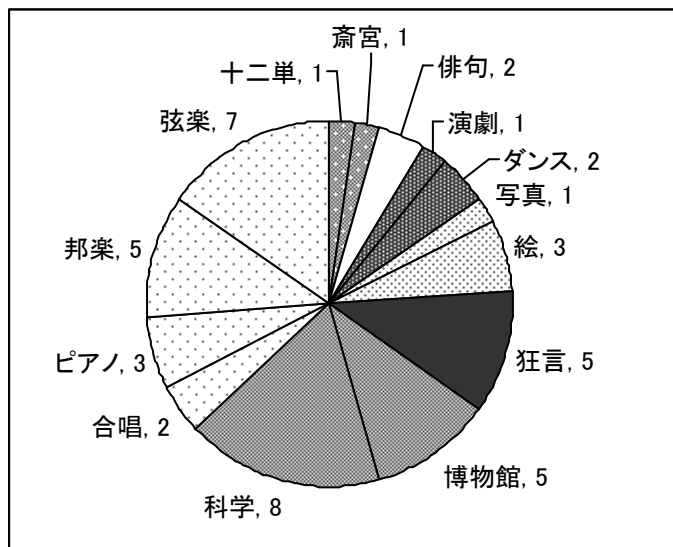
図1 平成23年度プログラム実績



単位：回 n=46

具体的な内訳は、音楽（弦楽・邦楽・ピアノ・合唱）、サイエンス（科学・三重県立博物館）、伝統芸能（狂言）、美術（絵・写真）、コミュニケーション（ダンス・演劇）、短詩型文学（俳句）歴史（斎宮歴史博物館・十二単）。プログラムごとの実施回数は、図2のとおり。

図2 平成23年度プログラムごとの実施回数



単位：回 n=46

表1 平成23年度実施プログラム／実施校一覧

No	日時	内容	学校（会場）名	受講者数
1	5月27日（金）	音楽に感動！（合唱体験）	亀山市立亀山南小学校	4,5,6年生 のべ558名
	6月15日（水）	提供：合唱団うたおに		
2	6月2日（木）	弦楽器の楽しさを体験しよう！ 提供：日本弦楽指導者協会三重県支部	津市立安西小学校	4年生 13名
3	6月17日（金）	サイエンス系授業 提供：科学サークル 大黒屋	津市立西が丘小学校	2年生 144名

4	6月21日(火)	ダンス！ダンス！ダンス！ 提供：ヒデ・ダンス・ラボ	名張市立箕曲小学校	5年生 27名
5	6月24日(金)	楽しい俳句 提供：三重県短詩型文学協会	大台町立三瀬谷小学校	5,6年生 58名
6	6月24日(金)	弦楽器の楽しさを体験しよう！ 提供：日本弦楽指導者協会三重県支部	鈴鹿市立庄内小学校	5年生 29名
7	6月24日(金)	土器にふれよう！斎宮を知ろう！ 提供：斎宮歴史博物館	松阪市立第三小学校	6年生 36名
8	7月1日(金)	楽しい俳句 提供：三重県短詩型文学協会	志摩市立御座小学校	3～6年生 19名
9	7月6日(水)	サイエンス系授業 提供：科学サークル 大黒屋	三重大学教育学部附属 小学校	3年生 114名
10	7月12日(火)	三重の伝統文化を体験しよう(狂言) 提供：三重県能楽連盟	松阪市立小野江小学校	6年生 20名
11	8月5日(金)	昆虫切り絵 提供：三重県立博物館	津市立栗真小学校 一身田中学校国児分校	6年生、中学 1～3年生 25名
12	9月30日(金) 10月7日(金) 11月9日(水)	音楽に感動(合唱) 提供：合唱団うたおに	亀山市立亀山南小学校	1,2,3年生 61名
13	10月7日(金)	サイエンス系授業 提供：科学サークル 大黒屋	鈴鹿市立庄内小学校	5年生 29名
14	10月11日(火)	化石レプリカづくり 提供：三重県立博物館	松阪市立小野江小学校	6年生 20名
15	10月14日(金)	サイエンス系授業 提供：科学サークル 大黒屋	鈴鹿市立庄内小学校	6年生 22名
16	10月17日(月)	三重の伝統芸能を体験しよう！(狂言) 提供：伊勢能楽連盟	紀北町立船津小学校	3～6年生 27名
17	10月25日(火)	三重の伝統芸能を体験しよう！(狂言) 提供：伊勢能楽連盟	大台町立三瀬谷小学校	5,6年生 57名
18	11月4日(金)	ダンス！ダンス！ダンス！ 提供：ヒデ・ダンス・ラボ	松阪市立第三小学校	5,6年生 86名
19	11月10日(木)	化石レプリカづくり 提供：三重県立博物館	津市立西が丘小学校	3年生 155名
20	11月11日(金)	日本音楽の楽しさを体験しよう！ 提供：三重県三曲協会	志摩市立御座小学校	3～6年生 17名
21	11月18日(金)	演劇ワークショップ 提供：津あけぼの座	鈴鹿市立庄内小学校	6年生 21名

22	11月22日(火) 12月5日(月)	音楽に感動！(ピアノ) 提供：ピアニスト 伊藤亮子	津市立明合小学校	1～6年生 118名
23	11月27日(日)	三重の伝統芸能を体験しよう！(狂言) 提供：伊勢能楽連盟	松阪市立機殿小学校	5,6年生 19名
24	11月29日(火)	昔の道具体験 提供：三重県立博物館	津市立大井小学校	2,3年生 22名
25	11月29日(火)	音楽に感動！(ピアノ) 提供：ピアニスト 伊藤亮子	津市立豊津小学校	5年生 27名
26	12月1日(木)	弦楽器の楽しさを体験しよう！ 提供：日本弦楽指導者協会三重県支部	くろしお学園尾鷲分校	高等部 17名
27	12月6日(火)	日本音楽の楽しさを体験しよう！ 提供：三重県三曲協会	三重大学教育学部附属 小学校	5年生 104名
28	12月8日(木)	日本音楽の楽しさを体験しよう！ 提供：三重県三曲協会	三重大学教育学部附属 小学校	6年生 113名
29	12月9日(金)	サイエンス系授業 提供：科学サークル 大黒屋	松阪市立第三小学校	6年生 37名
30	12月9日(金)	サイエンス系授業 提供：科学サークル 大黒屋	松阪市立第三小学校	5年生 53名
31	12月13日(火)	弦楽器の楽しさを体験しよう！ 提供：日本弦楽指導者協会三重県支部	津市立豊津小学校	4年生 45名
32	12月13日(火)	写真の原点『カメラオブスクラ』を作成 してみよう！ 提供：写真師 松原 豊	津市立高宮小学校	6年生 14名
33	12月14日(水)	絵を描こう！ 提供：絵本作家 つつみあれい	東員町立三和小学校	2年生 32名
34	12月15日(木)	三重の伝統芸能を体験しよう！(狂言) 提供：伊勢能楽連盟	津市立豊津小学校	6年生 42名
35	1月12日(木)	音楽に感動！(ピアノ) 提供：ピアニスト 伊藤亮子	津市立栗真小学校	2年生 13名
36	1月12日(木)	弦楽器の楽しさを体験しよう！ 提供：日本弦楽指導者協会三重県支部	県立豊学校	高等部1年生 7名
37	1月16日(月)	弦楽器の楽しさを体験しよう！ 提供：日本弦楽指導者協会三重県支部	伊賀市立中瀬小学校	5年生 17名
38	1月20日(金)	日本音楽の楽しさを体験しよう！ 提供：三重県三曲協会	松阪市立伊勢寺小学校	6年生 26名
39	1月23日(月)	日本音楽の楽しさを体験しよう！ 提供：三重県三曲協会	四日市市立塩浜小学校	5,6年生 75名

40	1月24日(火)	サイエンス系授業 提供：科学サークル 大黒屋	津市立大井小学校	3年生 13名
41	1月27日(金)	絵を描こう！ 提供：絵本作家 つつみあれい	津市立栗真小学校	3年生 20名
42	1月30日(月)	サイエンス系授業 提供：科学サークル 大黒屋	松阪市立掃水小学校	6年生 39名
43	2月2日(木)	弦楽器の楽しさを体験しよう！ 提供：日本弦楽指導者協会三重県支部	津市立栗真小学校	4年生 12名
44	2月22日(水)	絵を描こう！ 提供：絵本作家 つつみあれい	伊賀市立中瀬小学校	2年生 14名
45	2月28日(火)	十二単を体験しよう！ 提供：小林豊子きもの学院	鈴鹿市立栄小学校	6年生 42名
46	3月15日(木)	化石レプリカづくり 提供：三重県立博物館	津市立栗真小学校 国児分校	5年生～ 中学3年23名

2. プログラム提供先

文化体験パートナーシップ活動推進事業（以下：本事業）におけるプログラム提供先は、依頼内容によって次の3グループに分類することができる。

(1) 実演家団体

「邦楽」や「弦楽」、「伝統芸能」、「短詩型文学」は、各実演家団体を通じて実演家を派遣する。

(2) 文化・社会教育施設

文化・社会教育施設は、プログラムの内容に応じて各分野の専門職員を派遣する。

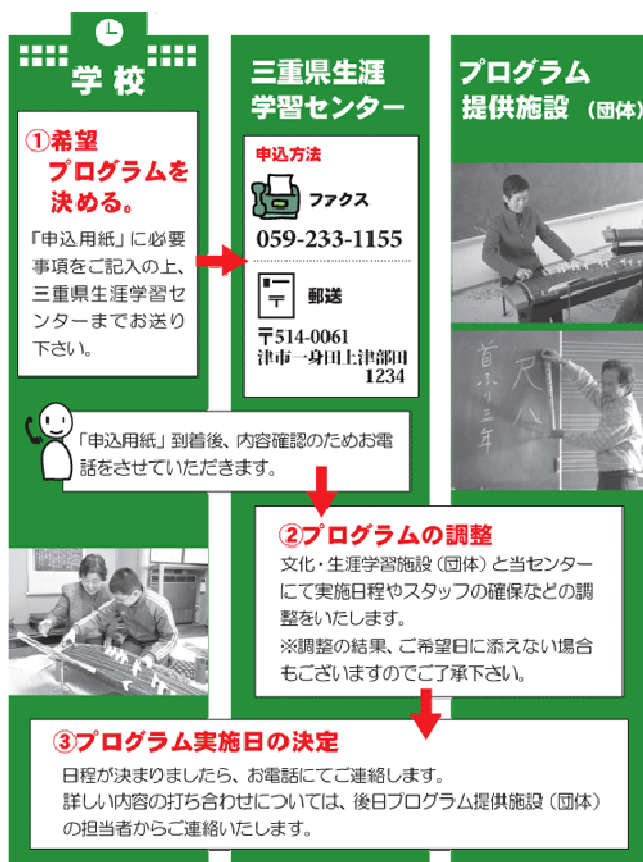
(3) 個人

地域人材の活用という観点から、絵本作家や舞踏家、演出家など、センターが直接、県内で活躍する専門家や実演家に依頼している。

3. プログラムの流れ

学校からセンターへプログラムの申し込みが入ると、まずセンターが学校に、学年、人数、日程、授業時間数を確認するとともに、プログラムの要望についても聞き取りを行う。その後、専門家・実演家や、実演家団体に連絡。専門家・実演家と調整の結果、プログラムの開催が決定すると、学校、専門家・実演家、センターの三者で、プログラムの内容などについてより詳細に打合せを行う。プログラムは、課外活動ではなく、「国語」や「音楽」といった教科の授業の一つとして位置づけることを前提としている。各プログラムに基本となる流れはあるものの、プログラム前後の学習の流れや、学校の要望、学年、授業時間数など、学校ごとに最適のプログラムを創ることが求められる。プログラム実施後は、プログラムに関するアンケートを児童・教員向けに行い、結果は専門家・実演家にも還流する。

図3 プログラム実施までの流れ



4. プログラム事例

（1）音楽プログラム「弦楽器の楽しさを体験しよう！」

【実施日】平成23年12月1日（火）

【実施校】県立特別支援学校くろしお学園おわせ分校
高等部17名 ※鑑賞のみ小・中学生4名

【提供】日本弦楽指導者協会三重県支部

- 【内容】
1. 演奏鑑賞
 2. 楽器の解説
 3. ヴァイオリン演奏体験

前半は高校生と小・中学生と一緒にプロの演奏を鑑賞した。演奏曲目は「チャルダッシュ」「星に願いを」。またヴァイオリン、ビオラ、チェロといった弦楽器についても学習した。

後半は高等部の生徒がヴァイオリン演奏を体験した。練習曲は「メリーさんの羊」。グループに



分かれ、楽器の構え方から教わり 15 分程度練習すると、ワンフレーズ弾けるようになった。きれいな音を出し、教員を驚かせていた。

最後に「メリーさんの羊変奏曲」の模範演奏を鑑賞した。生徒は最後まで集中力を切らさず真剣に鑑賞しており、本当に音楽を楽しんでいたようだ。

（２）サイエンスプログラム「ハッピーメガネで幸せになろう」

【実施日】平成 23 年 10 月 7 日（金）

【実施校】鈴鹿市立庄内小学校 5 年生 29 名

【提 供】科学サークル大黒屋 伊藤 仁 さん

- 【内 容】
1. 虹の実験、解説
 2. ハッピーメガネ工作
 3. ハッピーメガネを使った光の実験

虹の実験を行った。“虹は丸い”ということを実験で学んだ後、「ではなぜ普段、虹は丸く見えないのか？」という疑問について、傘を虹に見立てた実験道具を使って、その原理を体感した。次に、レンズ部分にプリズムシートを貼って『ハッピーメガネ』を作成し、そのメガネを使って光の実験を行った。メガネをかけると、光や炎を中心にして虹色に輝きを放っているように見え、子どもたちからは、驚きや喜びの歓声があがった。

また「虫が好きな光はどちらか？」という質問には、「コンビニの入口でこの色のライトを見た」「こっちの明るい色にたくさん寄ってくるから」など、子どもたちは、実体験に基づき積極的に回答していた。



（３）伝統芸能プログラム「三重の伝統芸能を体験しよう！」

【実施日】平成 23 年 12 月 15 日（木）

【実施校】津市立豊津小学校 6 年生 42 名

【提 供】狂言師 森 浩一 さん

- 【内 容】
1. 狂言や狂言師についてのお話
 2. 狂言の『笑い方』『泣き方』体験
 3. 『柿山伏』鑑賞
 4. 面・扇子体験、衣装を着けて狂言を演じる体験

『柿山伏』鑑賞の前に、講師から「狂言は現代の吉本新喜劇のようなもの」という話を聞いていたからか、子どもたちからは演



者の動きや、話の“笑い”の部分で笑いが起こっていた。鑑賞後は、面をつけて歩いてみたり、扇子を手にとってみたりと、なかなかできない体験をした。また4人の児童は、衣装を着け実際に狂言を演じる体験を行った。

はじめは恥ずかしがっていた子どもたちだが、少しずつ気持ちがほぐれてきたのか、たくさんの笑顔を見せていた。

(4) 美術プログラム「絵を描こう！」

【実施日】平成24年1月27日（金）

【実施校】津市立栗真小学校 3年生 20名

【提供】絵本作家 つつみ あれい さん

【内容】

1. グループで順番に“絵しりとり”をしながら絵を描く
2. 全員で絵を仕上げる
3. 出来上がった絵を見ながら“物語”を創っていく

担任教員の名前から“しりとり”をスタートした。第1グループが相談しながら大きな紙に絵を描く。絵から連想できる言葉の絵を、次のグループが描く。このようにして絵でしりとりを行った。子どもたちは、「こうするのときれい！」と言いながら、手のひらで模様をつけるかのように描いたり、筆で絵の具を飛ばしたりして大きな一枚の絵を完成させた。3グループで3回しりとりをし、完成させた絵は圧巻だった。最後は独特の世界観を持った絵を見ながら、みんなで物語を創った。



(5) コミュニケーションプログラム

「ダンス！ダンス！ダンス！」

【実施日】平成23年6月21日（火）

【実施校】名張市立箕曲小学校 5年生 27名

【提供】ヒデ・ダンス・ラボ

- 【内容】
1. 「笑う」を身体で表現する
 2. 曲にあわせてダンスを踊る
 3. 模範演技

最初に身体で気持ちを“表現”することを学んだ。実演家が身体を大きく使って『笑う』ことを表現した。そして次は子どもたちが実践。床をたたきながら笑ったり、友だちと身体をねじりながら笑ったりと、初めてとは思えないほど表現力豊かに笑っていた。



柔軟体操後、ボールやいろいろな動きを取り入れたダンスに挑戦し、グループで動きを1つ創作した。逆立ちをしたり跳び箱をしたりと、それぞれのグループにあったダンスが出来た。

最後に実演家による模範演技を鑑賞した。「人形が動き出す」というコンセプトのダンスを、子どもたちは食い入るように観ていた。終了後は名残惜しそうに、実演家の方々と笑顔で別れを交わす子どもたちの表情が印象的だった。

（6）短詩型文学プログラム「楽しい俳句」

【実施日】平成23年7月1日（金）

【実施校】志摩市立御座小学校 全校児童19名

【提供】俳人 神田 ひろみ さん

- 【内容】
1. 俳句クイズ
 2. 校庭で作句
 3. 作品を講評する

俳句の鑑賞から授業が始まった。「あつきんぎよ、いそぐとドレスがぬげちゃうよ」。この作品は、驚きが素直に出ていて読む側もはっとさせられる作品。難しい言葉ではなくて、自分で気づいたことや思ったこと、感じたことを読むのがよい作品だと講師は話された。

次に、外に出て俳句作りに挑戦した。あいにくの雨だったが傘をさして、畑で育てている夏野菜や池の金魚を観察したり、晴れの日を恋しく思ったり、夏休みにわくわくしたりと、それぞれが今興味や関心があることをテーマに俳句を考えたと。そして教室に戻ってたんざくに清書した俳句を、講師に講評してもらった。それぞれの人柄が伝わってくる俳句がたくさんできていた。



（7）歴史プログラム「土器にふれよう！ 斎宮を知ろう！」

【実施日】平成23年6月24日（金）

【実施校】松阪市立第三小学校 6年生36名

【提供】斎宮歴史博物館 山中 由紀子 さん

- 【内容】
1. 昔の地図や、発掘に関する授業
 2. 土器に触れる体験

前半は第三小学校周辺の地図と、120年前の地図を見て、自分の家や学校の場所を探した。昔のことを知るには昔の地図や記録を見るが、記録のないずっと昔のことを知るには「発掘調査」が重要な手がかりになるということを教わった。「斎宮跡」遺跡の



発掘調査で実際に使われている道具や、「斎王」についてクイズ形式で学んだ。

後半は斎宮跡から発掘された土器にふれる体験をした。土師器（はじき）や須恵器（すえき）、灰釉陶器（かいゆうとうき）や緑釉陶器（りょくゆうとうき）が並べられ、色や手触りなど土器の特徴とともに、いつ頃どんな風に使われたのかを一緒に考えた。

普段は斎宮歴史博物館のガラスケースの中に並べられている貴重な土器という話を聞き、学芸員の注意をしっかりと守りながら大事そうに持ち上げ、興味津々に中身や裏側などをじっくり観察していた。

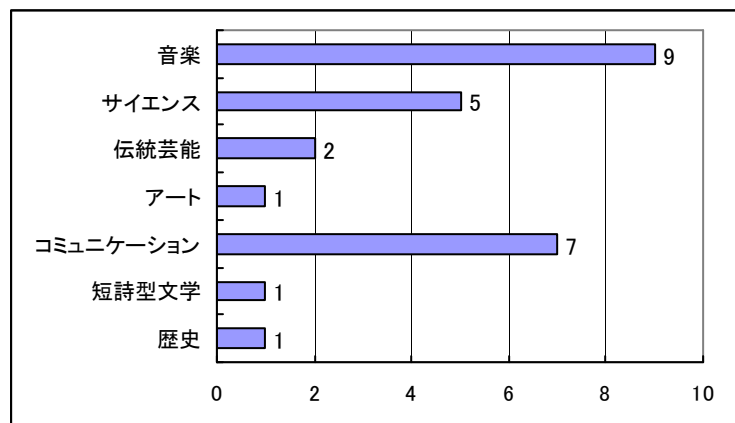
IV. 調査結果

1. 調査対象

平成 23 年度に、本事業で活動した専門家・実演家に対してアンケート調査を行った。

アンケート調査で回答のあった専門家・実演家の属性は図 4 のとおり。プログラムの種類によって講師の人数は異なる。「アート」や「短詩型文学」など、1 人で実施するプログラム

図 4 講師属性



もあれば、「ダンス」や「弦楽」、「邦楽」など、複数で対応するプログラムもある。そのため、プログラム実施回数に比べると、コミュニケーション分野の専門家・実演家が多くなっている。 単位：人 n=26

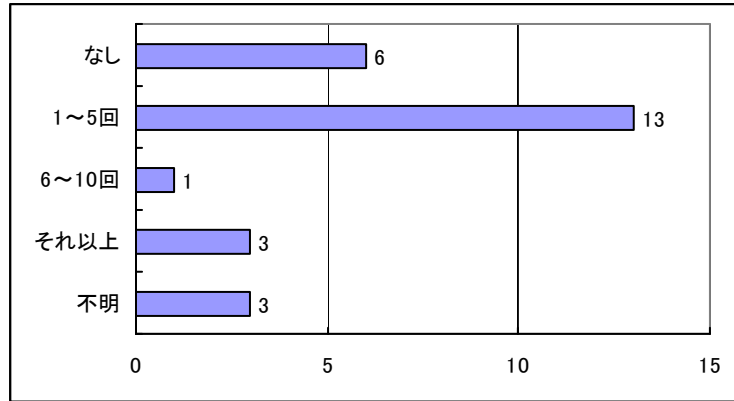
2. 専門家・実演家の活動実績（文化体験パートナーシップ活動推進事業を除く）

専門家・実演家が、学校向けに体験授業を行う取り組みは、センターが実施する本事業の他にも各地で行われている。専門家・実演家に、本事業以外で平成 23 年度に行った学校への文化体験プログラム実施回数や、依頼元、謝金について聞いた。

（1）活動回数

平成 23 年度に本事業以外で、学校向けに文化体験プログラムを行った回数は、他の機関からの依頼が 1 回以上あるという専門家・実演家が多数だった。音楽や伝統芸能の分野など、中には、20 回以上と回答する専門家・実演家も複数いた。その一方で、本事業のみという回答も 6 件あった。

図5 Q. 三重県生涯学習センター以外から学校への出向依頼はありました

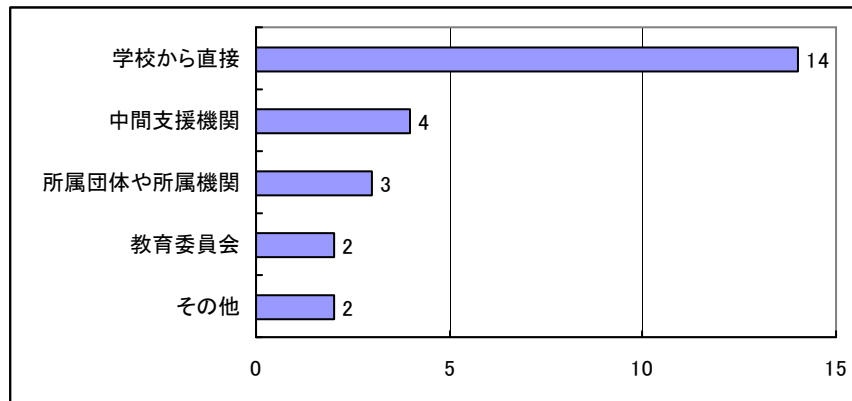


単位：回 n=26

(2) 依頼元

文化体験プログラムの依頼元は「学校から直接」という回答が圧倒的に多かった。また、文化・社会教育施設では、独自に学校向け文化体験プログラムに取り組んでいる場合が多い。他にも、国の機関、市町教育委員会や、各実演家団体でも学校へアーティストの派遣事業を行っている。

図6 Q. その依頼は、どこからですか？

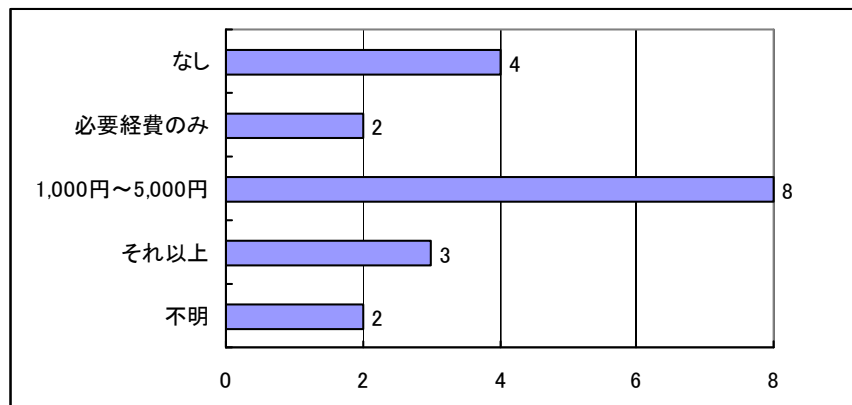


単位：回 複数回答

(3) 謝金

謝金等については、1回あたり1,000円から5,000円という回答が最も多かった。

図7 Q. その際に謝金等は支払われましたか？



単位：回 n=19

(4)「文化体験パートナーシップ活動推進事業」との相違点

また、これらの学校向け文化体験プログラムを行ううえでとまどった点やよかった点について自由記述式で聞いた。とまどった点に関しては、授業を行うために必要な費用や準備についての回答が多かった。例えば学校にない楽器の体験授業を行う場合は、楽器をレンタルする必要がある。鑑賞型ではなく、子どもたち全員が体験する場合は、人数にあわせて必要になる。本事業では、楽器等のレンタルはコーディネート機関が行うが、その他のケースでは、専門家・実演家側で行うこともあるようだ。よかった点に、「楽器屋さんへの手配もきっちりしていただける事」を挙げている回答もあることから、学校と専門家・実演家の二者で行う場合は、授業を行うために必要な準備の役割分担を整理させる必要があることが分かる。

Q. 三重県生涯学習センターがコーディネートした場合と比べて、とまどった点はありますか？
(抜粋)

- 楽器が持ちこみなので大変だった。
- 自分が所有の箏、譜面台等必要な物すべての用意を運び込むこと。
- 楽器の借用に費用がかかることを考慮しない点。
- 日程調整や会場セッティングなど、こちらの考えがスムーズに伝わらなかった点。
- サポートして下さる方が全くいないこと。
- ギャランティの考え方が異様に低い。正規の金額を提示したら「どうしてそんなに掛かるのか？」となった。

また、よかった点については、直接学校と調整を行った点についての回答が多かった。コーディネート機関が仲介した場合は、三者が打合せする日以外に、学校と専門家・実演家が直接話す機会はほぼない。特に、独自に学校向け文化体験プログラムに取り組んでいる文化・社会教育施設の専門職員からは、直接学校と調整することによるメリットについての回答があった。

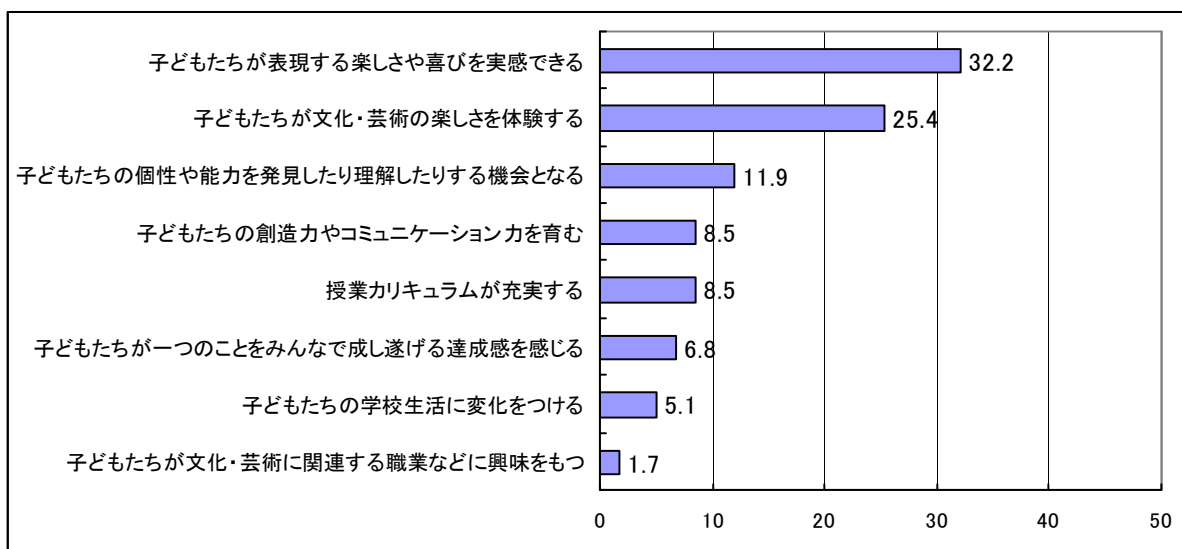
Q. 三重県生涯学習センターがコーディネートした場合と比べて、よかった点はありますか？
(抜粋)

- 実施日が相談できた。
- 最初に予定した通り実施される事。楽器屋さんへの手配もきっちりしていただける事。
- 時間に余裕がもてた。
- 先生方の言葉のニュアンスから何をどの程度期待しているのかがわかる。
- 内容を先生と直接調整でき、町内であるので齋宮について身近に感じてもらえているのでやりやすい。

3. プログラムのねらい

ここからは、「文化体験パートナーシップ活動推進事業」について聞いた。専門家・実演家に、プログラムを行ううえで、重要だと感じることを3つ以内で選択してもらった。回答の多かった上位2つに共通するのは、子どもたちが「楽しく」体験するという点だった。他項目の倍以上の回答を得ていることから、専門家・実演家の多くはプログラムを行うにあたって、子どもたちが「楽しく」体験することを最も重視していることがわかる。

図8 Q. プログラムのねらいとして特に大事にされていることは何ですか？

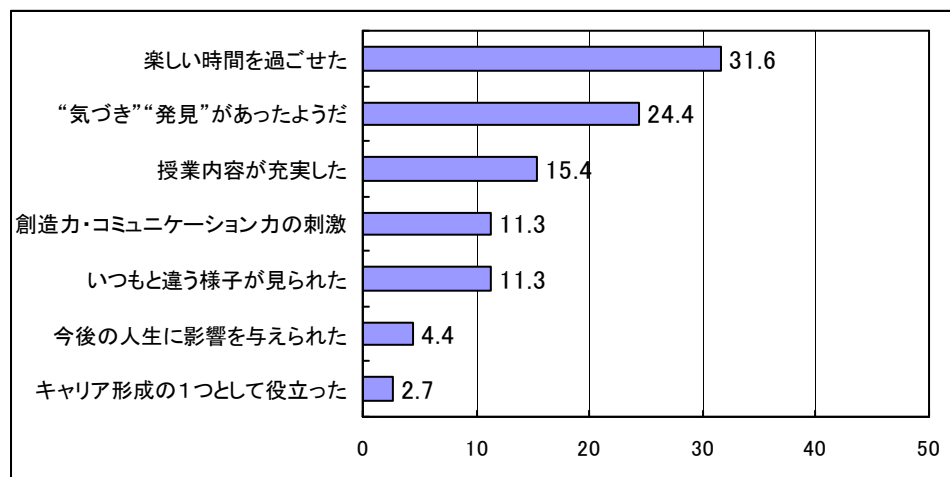


単位：% 複数回答

4. プログラムを受けた子どもたちへの影響

図9は、平成23年度に実施したプログラムにおいて、プログラム体験後に教員向けに行ったアンケートの結果である。アンケートでは、プログラムを体験した子どもたちからどのような影響が見てとれるかを聞いた。

図9 Q. 内容は子どもたちにとってどうだったと思われますか。



単位：% 複数回答

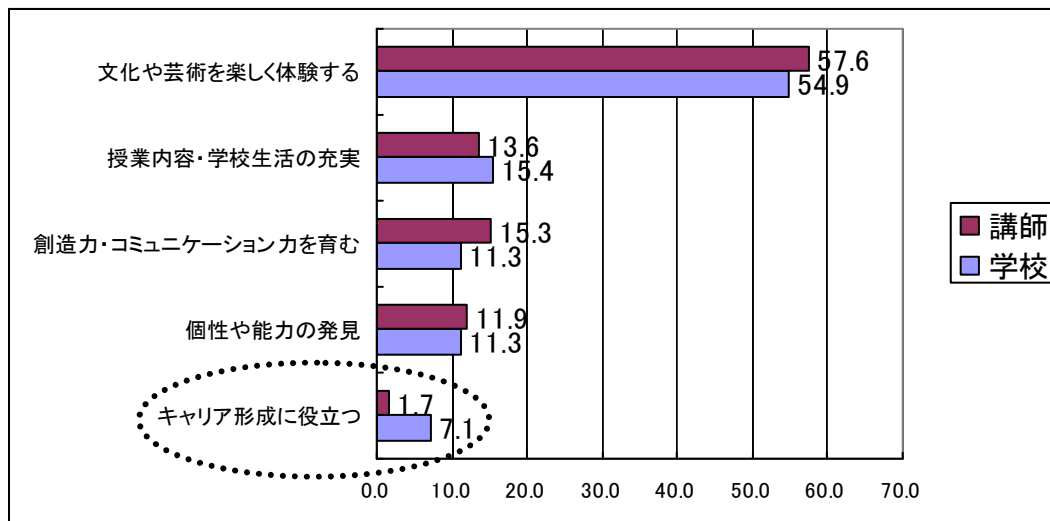
この結果、「楽しい時間を過ごせた」という回答が最も多く、次に「“気づき”“発見”があったようだ」という結果だった。アンケート回答人数は146だったことから、「楽しい時間をすごせた」は、全体の78.8%の教員が感じた子どもたちの様子だったことがわかる。

図8、9を活用して、近似する項目をまとめて集計したものが次の図10である。上段は専門家・実演家がプログラムで重要と感じている点、下段は教員アンケートからみえるプログラムを体験した子どもたちへの影響である。

専門家・実演家のねらいと、実際に体験した子どもたちの様子は、ほぼ近い結果になっているが、子どもたちの「キャリア形成に役立つ」という点に関しては、やや開きがあることがわかる。プログラム終了後の子どもたちの感想からは、「しょうらいわたしもなりたいたいと思いました。もっと練習をしてうまくなりたいと思いました。またしたいです（ダンス）」「わたしは、ピアノをなっていていつも家でいやいやで練習をしていました。でも、いとう先生のを見たら、先生みたいにピアニストになりたいから、ピアノをたのしく練習したいです（ピアノ）」など、専門家・実演家から影響を受けている様子がみえた。

プログラムを実施するうえで、子どもたちが実際に、芸術や文化を体験することは、もちろん重要なことではあるが、プロの専門家や実演家に出会い、直接ふれあうということも大きな要素のひとつである。専門家・実演家や教員の想像以上に子どもたちは、プログラムを通してプロの専門家や実演家の姿に憧れの気持ちを抱いていることが分かる。

図10 プログラムを受けた子どもたちへの影響



単位：%

5. プログラムを行うにあたって、工夫している点

本事業で行うプログラムは、1回で完結させるものがほとんどで、中には1時限（45分）で行うプログラムも少なくはない。また、体験を受ける子どもたちにとっては、初めて体験する分野である場合が多い。限られた時間内に子どもたちの興味関心を引き出す有意義なプログラムを行うために、専門家・実演家はさまざまな工夫を行っている。「プログラム内容」「子どもとの接し

方」について自由記述で回答してもらった結果、分野が異なる複数の専門家・実演家から、共通するキーワードが読み取れた。自由記述の共通部分を下線で示した。

Q. 子どもとの接し方や、進め方などで工夫したことはありますか？（抜粋）

（１）「プログラム内容」について

【キーワード：状況判断・臨機応変】

- 状況に応じて（出来具合によって）選べるプログラムを用意する。
- その時の子どもたちの雰囲気や反応によって予定を変更したり、臨機応変に動き、進行できるように心がけています。
- 様々な学校、学年へ伺わせてもらっているが、同じ内容を話す場合でもその学年、クラスによって話し方を変えたり、補足説明をしたりしています。
- その時々の子どもたちの体力、精神面を考慮。

【キーワード：楽しむ】

- パワーポイントを使って画像を通して昆虫のギ態をテーマに見せる方法をとった。また昆虫切り紙を通して昆虫の造形を楽しむことをこころがけた。
- 飽きないように、映像、クイズ、実物をさわる体験を入れる
- むずかしく感じている事は何かを見つける。楽しめているかを感じ取る。

【キーワード：親近感・かんたん・わかりやすい】

- 子どもたちの知っている曲、聞いたことのある曲を選ぶ。
- 学年によって取り上げる作品（曲）を変えること。たとえ聴いたことのない曲でも何かを感じることはできるので、比較的イメージしやすい曲を選ぶようにしています。
- 身近な物をつかいたししみやすく、わかりやすく、楽しめる様に（テニスボール、有名な曲、人気アニメなど）心がけている。
- 学校に合わせて、誰でもできる様な簡単な動きを入れて、ちょっと難しい動きも取り入れました。ダンスの振付は子どもたちの知っているお笑い芸人のギャグや、スポーツなどとっかかりやすいプログラム内容にしました。
- 日常の音楽の授業との関連で譜読みができるようにする。
- 小学生にわかりやすい言葉づかいや演出を考える。特にむずかしくなりすぎないこと。

（２）「子どもとの接し方」について

【キーワード：ほめる・達成感】

- 個人差がありますのでその子どもさんに出来ることを指導させて頂き、うまくいったら一緒に喜んであげました。
- ヴァイオリンは音を出すだけでも難しい楽器なので励ましの言葉かけをし、少しでも音がきれいに出せたらほめるようにしている。

- 支持的対応をすることを心がけている。
- 講師の提案したプログラムの中で、子どもたちが戸惑ったりした時に「何をしてもOK」という事を伝え続けるようにしていました。
- 内容が子どもたちに達成感を味わえるように考える。
- できるだけひとりひとりにはなしをするようにしたこと。自信を持たせるようにしたこと。

【キーワード：コミュニケーションをとる】

- 質問の形などを取りながら一方的に説明するのではなく、子どもたちと直接話し合う形を取って興味を引き出すようにした。
- 何度も子どもたちの反応を確かめる為に質問、出来れば討論が形成されれば良いと思う。
- できるだけ子どもたちが身近に感じられるように、”語り口調”で話し、目をしっかりと見る
- 対話しながら進めていったことと、昆虫切り紙による参加型を取り入れた。
- 今はまっていることや好きなもの、人などいろいろな会話をしています。
- プログラムを始める前に、子どもたちに話しかけたり、こちらから挨拶をして子どもたちとの距離を縮める。

【キーワード：興味や関心を引き出す】

- まずヴァイオリンという楽器がどんな音が出るのか聴いてもらうためにオープニングでソロの演奏をして興味・関心を引き出す。次に弦楽器の音の出るしくみを学び楽器の扱い方を知ってから体験プログラムへ入っていくという工夫をしている。
- 「言葉」に重点を置いた。声に比重を置く指導もあるが、「何をどう伝えたいのか」が歌には重要なので、子どもたちにその意欲が生まれるように。

6. プログラムを行って難しかったところや負担に感じた点

次に、プログラムを行ううえで、難しく感じたこと、負担に感じたことについても自由記述で回答してもらった。特に、専門家・実演家として日常の活動を行う中で、プログラム提供側として時間を確保するための日程調整や打合せのあり方に関すること、限られた授業時間数にプログラムを行わなければならないこと、人数やクラスの雰囲気によっては難しく感じる子どもとの接し方についての回答が多かった。以下に、日程調整、打合せ、授業時間、子どもとの接し方の各項目について記述された部分を下線で示した。

Q. 学校で授業を行って難しかったところ、負担に感じたところ等、課題はありますか？（抜粋）

（1）日程調整

- 講師6名のスケジュールをあわせるのが大変。
- 設定される日が候補日いずれもが近接しており、業務がたてこんでいるとどちらも厳しい場合がある。今回は日の提示が担当にされたのが、あまり期間に余裕がなく大変苦しかった。

(2) 打合せ

- 打合せの学校が遠いと交通の便で問題あるとの意見も聞いている。
- 慣れれば電話でも可能かな。
- 必ずしも必要ではないのでは？
- これまでにレプリカ作りを経験した学校では、事前の打ち合わせの必要はなく、余分な負担があったと思う。

(3) 授業時間

- プログラムを欲張りすぎて、たくさん詰め込みすぎたため時間が足りなくなったこと。臨機応変に対応できるべきと感じています。
- 合唱というテーマは、長期的なプランが理想なので、限られた時間・期間では、現実的にはプランニングが難しい。特に「声づくり」は数回の、わずかな期間では実現できない要素が多いと感じます。
- 時間に余裕がなくなるとどうしても子どもさんたちとのやりとりが少なくなってしまう。その点を改善したい。
- 授業時間が短い時は、プログラムのどこに重点をおくか、その時の子どもたちのコンディションによって変わってくるので、早急に見極めるのが難しいです。
- 1学年に複数のクラスがある場合、どうしても全ての生徒に体験をとり、カリキュラム変更が難しいので、開催できない場合が多い。またその場合、複数のクラスの各担任の意識が違うことが多い。

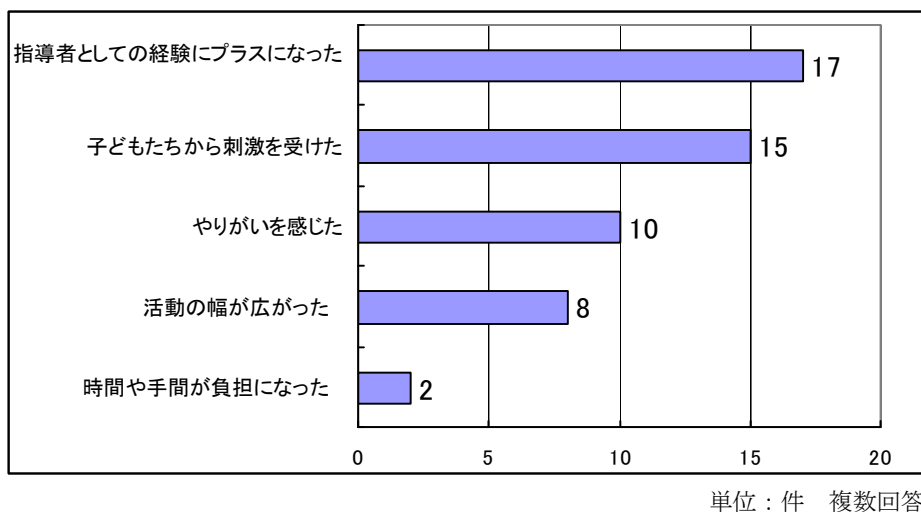
(4) 子どもとの接し方

- 集中が続かない時やりにくい。あまり多人数や広すぎる場所は集中しにくいかも・・・という気がする。
- クラス単位だからむずかしいお子さんをかかえているクラスは時々その反応対応に神経をつかう。
- レプリカ作りを失敗した子どもへの対応を考える必要がある。
- ある学校では最初から最後まで無表情・反応が薄いという所がありました。そういう子どもたちをよりダンスは楽しいんだ！！と思わせる事が大きな課題だと思います。

7. 専門家・実演家への影響や変化

専門家・実演家が、学校向けにプログラムの講師として活動を行うことから感じられる影響や変化について、選択式と自由記述式で回答してもらった。「指導者としての経験にプラスになった」「子どもたちから刺激を受けた」等、良い影響を受けている専門家・実演家が多い一方、プログラムに関わる「時間や手間が負担になった」という回答もあった。

図 11 Q.プログラムの講師として活動するようになって、ご自身の普段の文化・芸術活動に
影響や変化はありましたか？



また、上記項目の他に感じた影響や変化を、自由記述してもらった。プログラムの講師は、普段専門家や実演家としての活動に加え、教室や所属団体等で指導を行っている方が多い。この場合、技術や知識を習得したいという明確な意欲を持って参加する生徒を指導することが多いが、学校では、意欲や興味のあるなしに関わらず授業として取り組む子どもたちへ指導する。さまざまな環境、さまざまな反応を見せる学校での指導経験によって、指導者として新しい視点や幅を広げられているようだ。

自由記述 (抜粋)

- 子どもさんたちが興味を示し“楽しい”“驚いた”ということ顔を態度（体全体）で表現してくれると、やりがいを感じます。また、大人には多くの既成概念があるが、そんなものにはとらわれず、色んな質問が飛び交うことに刺激を受け、それを指導に生かしています。
- 子どもたちが笑顔で楽しんでやっているのを見た時に、やりがいを感じました。たくさんの生徒の前で教える緊張感や不安感がありながらも、場数をこなしていくうちに、気持ち的にも成長出来たと思います。
- 体験プログラムだからという限られた現場だからではないが、様々な人、団体と接することは、指導をしているようで、実は多くを学ばせていただいているというのが正直なところです。
- 子どもたちにも個性があるように、大人にも個性がある。指導する立場に立った時に個性に合わせた言葉を選ぶようになりました。

8. 専門家・実演家から見たプログラムを受けた子どもたちの様子

プログラムで特に印象を感じたことを自由記述式で回答してもらった。学校の授業という限定された範囲内で確立されていた、子どもたちの中での評価軸が、プログラムを実施することによって、新しい評価軸に気づく場合がある。この点を印象的に感じたという回答している専門家・実演家が多い。プログラムを実施することによって、普段は見られないような子どもたちの表情や様子を引き出すことが、プログラムを行ううえでの専門家・実演家の「やりがい」につながっているようである。

Q. プログラム中の出来事や子どもたちの反応などで印象に残っているエピソードがあればご記入
ください。(抜粋)

- 演劇プログラムをやっていてよく起こるのは、発表後に担任の先生から「普段は寡黙な〇〇君が」とか「あの子大丈夫かなあと思っていた□□ちゃんが」というような、普段では見られない大きな変化が体験を通じて起こることは、おわってからの振り返りでよく聞きます。また、子どもたちの間でも、同じように子どもの見方が変わるようです。
- 説明を聞いたり、体験中の子どもたちの一生懸命なこと。弾けた時のヤッターと言った笑顔、体験後の感想を正直に話せたことなど、子ども達に元気をいただきました。
- まったく興味を示さなかった男子軍団がピアノの実験（オルゴール）の際には、こちらが驚くほど静かに聞き入ってくれたこと。本当に大切な、また伝えたいことを言う時は小さな声、音で訴えることが効果的であると再確認しました。それ以来、大切なことを伝える際には、静かな環境を作るように心がけています。
- いちばん描くことを全身でたのしんでいた子のことを、「あの子はとても絵がすきなんです」と授業のあとに先生に言ったら「ぜんぜんですよ！」とおどろいていたこと。先生には分からない、そういう子に自信を持って、自分らしくていいと思ってもらうことができたら、と思いました。うまく言えませんがそれが私の役目と思います。
- 対象とする子どもたちの学齢によっても異なると思いますが、昔の道具体験活動では、子どもたちが自らすすんで積極的に行動するところを感じさせられました。その積極性を活かしたプログラムの実践が必要とあらためて感じました。
- 昆虫切り紙のすべてに挑戦したいという気持ちになってくれたこと。
- 話をしっかり聞き入れる態度をとってくれたこと。
- どの小学校に行っても、はじめは固い表情の子も後半になる頃には笑顔で踊っている姿を見ると、やっぱり踊りの力は凄いと感じます。

9. 「文化体験パートナーシップ活動推進事業」への要望

本事業への要望を、自由記述式で回答してもらった。特に、この取り組みの周知や普及についての要望が多かった。本事業をはじめ、さまざまな機関・団体が、学校向けに文化・芸術の体験授業を行っている。三重県が平成 22 年に発行した『小学校における文化芸術アウトリーチ活動調査事業報告書』によると、調査対象の内、実施しないと回答した学校で、最も多かった理由は、「文化芸術アウトリーチ活動に関する情報の不足」である。次いで、「専門家やコーディネーターとの打合せや調整に時間がかかる」、「実施するために経費がかかる」という負担感を抱えていることが分かる。地域でもっと活動したいという専門家・実演家側と、文化・芸術体験授業の導入に二の足を踏む学校側をつなぐ、コーディネート機関の役割が重要であるが、課題もある。

センターが平成 20 年度から実施している「文化体験パートナーシップ活動推進事業」は、現行の組織体制では実施可能数が飽和状態になりつつある。また、分野によって、プログラム提供できる専門家・実演家の人数にばらつきがある。邦楽の場合、県域団体を通して実演家を派遣するので、比較的プログラム実施回数が多くても、年間通じて、同一の実演家に依頼する回数は、1～2 回程度である。しかし、他の分野についてはプログラム提供できる専門家・実演家が 1 人もしくは、1 グループのため、申込みが集中した場合は、学校から依頼があったとしても実施が難しくなる。この点については、専門家・実演家からも改善の要望が寄せられている。

また、より深い内容のプログラムを望む意見もあった。専門家・実演家の経験値はさまざまで、既に多くの学校で子どもたちに向けたプログラムを実施している専門家・実演家もいれば、本事業で初めて学校でプログラムを実施した専門家・実演家もいる。学校でのプログラム実施経験を積み重ねることによって、「もっとこんなことがしてみたい」、「こうすればもっとよくなる」というプログラムの質の向上への意欲が高まるようだ。専門家・実演家が挑戦してみたいことと、学校がプログラムに望むこと、双方のバランスを考慮したうえで、より有意義なプログラムが実施できるようにコーディネート機関としても支援していく必要がある。

Q. 体験プログラムへのご要望、ご意見などご自由にお書きください。(抜粋)

(1) 学校への周知・普及について

- 体験できるというピーアールを音楽の先生に周知してほしい。
- 学校向けの体験活動はボランティアだと思っています。しかし、個人では楽器の調達、運搬には限度があり、子どもたちが充分体験できない状況です。
- 体験授業は琴を用意して頂けることが一番有りがたいことです。この事業をもっと宣伝して頂き日本の伝統文化を皆さんに知って頂けるようによろしくお願いします。
- この様な学習をもっと多くの学校で活動できれば良いと思います。
- レプリカ作りは、専門でない方でもできるため、今後続けていくのであれば、学校の先生に方法を教え、型を貸し出し、先生方がそれぞれの教室で、レプリカ作りの授業を行う方が良いと思う。今の方法では、一部の学校の一部の教室のみに効果があるだけで、県全体に対しての効果は薄いと思う。

- 表現教育が今後進むと考えた場合、それこそ、生徒向けだけではなく、教職員が芸術文化のあり方を知る機会があまりにも少ないと思うので、その学校の教職員や、地域の教職員を対象としたプログラムや体験講座を提案できないかと思います。
- 単学級の学校以外へもこの活動が広まっていき、“学校の先生以外の、親の知り合いでもない大人”と子どもたちが交流する機会が少しでも増えれば、と思います。色々なパターンの人と触れ合う事で、対人的な応用力も増すと思いますので、今後も多くの子どもたちにきっかけをあげて下さい。
- 今年度から5年生に俳句の学習が必修となるように聞いています。小学校の先生方の負担感はかなり程度になると思われます。気軽に体験プログラムを活用して頂けたらと思っています。

Q. コーディネーター（三重県生涯学習センター職員）に期待することやご要望、ご意見など自由にお書きください。（抜粋）

（2）コーディネーターについて

- 体験の場を見られた職員の方が、その後の体験で良かった点の継続や又改善すべき点を指導者に伝えてほしい。
- 感想を聞かせていただく際、もっと過激なご意見をいただけるとありがたいです。遠慮なくよろしくお願いします。
- もう少し早い段階から先生と打合せ（コーディネーターとともに）ができると、学校の雰囲気、児童のようすなどからこちらもいろいろと提案できると思う。

（3）プログラムの運営について

- 応援ボランティアさんを2~3人補充して頂きたい。装束の片付け等に。
- 毎回、プログラムの最中だけでなく、準備や後片付けを手伝ってもらえるスタッフをお願いしたい。
- 子ども的人数に対して、講師の人数が少なかったなので、今後もう少し考えていただきたい。流派を越えて、ボランティアの気持ちで、講師の人数を増やして、多くの生徒に、もれなく体験できるようにできたらいいと思う。
- プログラムに合わせた時間数や期間を考慮していただけると、もっと効果的になると思います。
- 参加する団体を増やしていただきたいと思う。そうでないと、こちらがスケジュールの都合でことわらないといけない場合、学校が今後この事業を利用しなくなるであろうし、同じ分野で複数の団体の中でコーディネートしてほしいと思う。
- いろいろな企画・内容をやってみたい。
- 音楽の分野にとどまらず、美術等の分野とコラボレートしてみたいです。
- 1回のみではなく2回、3回ぐらい体験をし、最終に発表会の様な場を作ってあげるとより一体感、達成感があり、保護者の方にも見ていただけるプログラムになれば、家族ぐるみで体感できより世界感が広がるのではないかと思います。

V. まとめ

1. 課題

今回の調査では、本事業について、質・量・効率の三方向から次のような課題が浮き彫りになった。

(1) より充実したプログラムを行うために

学習効果と授業時間数

本事業で行うプログラムは現在、1回で完結させるプログラムがほとんどだが、内容や分野によっては、複数回行うことによってより学習効果が発揮できるプログラムもある。アンケートでもこの点についての回答が複数ある。平成24年度からは、専門家・実演家の要望と、学校の意欲、諸条件が調整できれば、複数回実施するプログラムや、分野の枠組を超えた複合的なプログラムの実施も試行している。

(2) より多くの学校でプログラムを行うために

①コーディネーター的人材の確保・育成

より多くの学校で、子どもたちが直接専門家や実演家とふれあい、文化・芸術を体験する機会をもてるようになることが望ましい。しかし、現行の組織体制では実施数が飽和状態になりつつある。今後、拡大していくためには、センター以外にも、コーディネートできる機関や、人材を確保する必要がある。

②専門家・実演家の確保

専門家・実演家によっては、さまざまな事情から、遠方には出向くことができないという方もいる。通常、打合せと実施日で最低2回は現地へ赴く必要があり、移動距離が長くなれば、拘束時間も長くなる。地理的な問題や、申込が集中した場合に対応しきれない、学校と専門家・実演家の日程がどうしても調整できないといった場合にプログラムが実施できないという事態を避けるためにも、各分野ごとに複数の専門家・実演家をコーディネートできる態勢を整えていくことが望ましい。

③安定的な財源の確保

規模の拡大に伴っては財政面の課題も同時にはらんでいる。「文化体験パートナーシップ活動推進事業」は三重県からの委託事業としてセンターが実施しており、学校側に金銭的な負担を求めている。専門家・実演家にとって学校での活動は、通常の活動とは異なり、少なからず社会貢献の意識で取り組んでいる場合がほとんどだ。しかしながら、プログラムを実施するには、II-2-(4)でも述べた通り、楽器のレンタル費用や、材料費等様々な経費が必要であり、それらは、専門家・実演家が単独で実施する場合、自己負担になることもある。「社会貢献」という大義名分の影に潜んで主張しにくい金銭的負担が、やがて学校での活動への負担感にもなりかねない。ま

た、学校側の状況も厳しいことが、『小学校における文化芸術アウトリーチ活動調査事業報告書』（平成 22 年・三重県）の結果にも表れている。学校向け文化体験プログラムを導入したいが出来ていないと回答した学校の最も多い理由は、「実施するために経費がかかる」であり、50%もの学校が回答している。コーディネーター機関の役割は、その二者をつなぎ、様々な面から、最適なプログラムを実施できるような環境を整えることであり、今後プログラムを拡大していくためには、安定的に財源を確保できる仕組みが必要である。

（3）より効率的にプログラムを行うために

①コーディネーターの役割

本事業の講師は普段、学校での活動を主として行っているわけではない。通常は、所属団体や組織での業務や、教室の指導者、専門家・実演家として活動を行っている。プログラムでは、学校、専門家・実演家、コーディネーターの三者によって、学校ごとに条件を摺り合わせプログラムを創ることが求められるが、専門家・実演家の状況によっては、事前に学校へ赴き、担当教員と直接打合せを行うことが困難な場合がある。その場合であっても各学校の諸条件に適したプログラムを行うことができるよう、コーディネーターの役割が重要になる。

②学校側の理解

専門家・実演家を招いた体験プログラムに積極的に取り組む学校がある一方、こういった授業を行わない学校もある。『小学校における文化芸術アウトリーチ活動調査事業報告書』（平成 22 年・三重県）では、調査対象のうち、学校向け文化体験プログラムを実施している学校は 50%だった。また、「文化体験パートナーシップ活動推進事業」では、新規校よりも過去に実施実績のある学校からの申込が多い。センターでは、夏期に三重県総合教育センターと共催して、教員向けに学校向け文化体験プログラムについての研修を行い、周知・展開を図っているところである。

事前に教員がプログラムの内容を把握し、意図や有効性について理解する研修を実施することは、新規プログラム実施校の拡大につながるとともに、より効果的にプログラムを実施することにもつながる。よく、プログラム中における教員の立ち位置について難しさを感じる場合がある。教員が介入しない方がよい場合、子どもたちと一緒に体験した方がよい場合、サポートに加わった方がよい場合。プログラムを受け入れる学校側にも、こういった体験授業の様々な特性についての理解を求めていく必要がある。

2. おわりに

今回の調査で回答があったほぼすべての専門家・実演家が、「ほめる」「子どもたちの反応をみる」といった、コミュニケーションの部分や、子どもたちにとって「楽しい」「親しみやすい」といったプログラム内容の部分で、意識的にプログラムに取り組んでいるということがわかった。プログラムで行う文化・芸術体験は、子どもにとって、人生で初めての経験になる場合が多く、良くも悪くも強く印象に残るという点で、諸刃の剣でもある。当然「もう 2 度とやりたくない」となるリスクもはらんでいる。このため、プログラムでは、参加する誰もが、ある一定の「でき

た」という成功体験を得られるよう内容のハードルを下げることも求められる。限られた時間・条件の中で、子どもたちがいかに興味を持って、楽しく取り組むことができるか、専門家・実演家に求められることは多い。

また、学校が求めることと、実際の子どもたちとのギャップを埋めたり、講師がプログラムで実践したいことと、今回の条件でできることを整理したりするコーディネート機関の役割も重要になってくる。

本調査では子どもたちだけではなく、専門家・実演家にとってもこの本事業が、さまざまな影響をもたらしていることがわかった。学校へ赴き、子どもたちと直接ふれあい、指導を行う中で、試行している様々な「工夫」や、日々感じている「むずかしさ」が、自身の指導経験に活かされるとともに、子どもたちの反応や様子から多くの刺激や、やりがいを感じたり、新鮮な気持ちで自らの文化活動に向き合う機会となったりしている。

地域の専門家や実演家と子どもたちが出会い、双方が幸福な時間を過ごせるよう、コーディネート機関である三重県生涯センターは、先に挙げた課題に取り組み、今後も本県の文化振興の一翼を担っていきたい。

参考：三重県生活・文化部（現：環境生活部）『小学校における文化芸術アウトリーチ活動調査事業報告書』，2010年

VI. 監修者のことば

学校向け文化体験プログラムを実施した地域の専門家・実演家に対する調査の意義

三重大学教育学部 教授 山田 康彦

三重県生涯学習センターがコーディネートして地域の芸術・科学の専門家・実演家の方々を、主に小学校に派遣する「文化体験パートナーシップ活動推進事業」は、平成20年度に試行を開始し、平成21年度から本格的に実施されている。その参加校は、平成20年：9校、21年：19校から平成24年には59校（70プログラム）と年々増加し、その成果と期待の高さが窺える。

今日、学校での学習や体験の質の向上が求められている。たとえば学習指導要領で児童・生徒の「思考力、判断力、表現力」や「問題解決的な学習」が強調されているように、一方で子どもたちのコミュニケーション能力や表現力、他方で柔軟で創造的な思考力や問題解決力の育成が強く求められている。このような力量を育むということは、学校での学習の質が変わらなければならないし、同時にそうした学習の質は学校においてでしか本格的には実現できない。学校がこのような学習の質を確保していくためには、当然ながらそれぞれの学校や先生方の力に依拠しなければならない。しかしそれだけでなく地域と連携した様々なサポートが必要である。そのサポートの重要な一つが、地域の芸術・科学の専門家・実演家による文化体験プログラムである。このような取り組みは、2000年代に入って展開されているイギリスのクリエイティブ・パートナーシップ事業をはじめとして、欧米やアジアの諸国でも実施され注目すべき成果を上げている。同趣旨の取り組みが各国で展開され始めているということは、現代の学校がより新鮮で新しい文化や科学の契機を取り込んで、その学習の質を高めようとしていることを示している。

学校での文化体験プログラムは、日本そして三重県でも広がりつつはあるが、まだ一部の学校に留まっている。様々な物的・人的環境を整えながら、多くの学校で取り組まれ、さらに生き生きした活動や学習が展開されることが求められる。

こうした三重県での文化体験プログラムに関する調査は、三重県によって平成21年度に「小学校における文化芸術アウトリーチ活動調査事業」が実施されている。また生涯学習センターによっても、プログラム実施後に教員対象等に振り返りのアンケートを経年的に実施している。その中で学校や子どもにとっての成果や課題はある程度明らかにされてきている。しかしプログラム提供側に対する調査は行われてこなかった。そこで今回専門家や実演家を対象にした調査が実施された。受け手側と提供側の双方に対する調査が行われることによって、学校での文化体験プログラムの成果、到達点、課題を総体的に明らかにすることができる。したがって現段階における総体的な状況を把握する上で今回の調査の意義は大きい。

実際に調査結果から、専門家や実演家の方々が子どもたちが楽しさや喜びを実感できることをたいへん重視していること、そして子どもとの接し方に気を配ったり、プログラムの内容を考慮したり、臨機応変に対応したりなど、様々な工夫や配慮をしていることが改めて明らかになった。さらにその多くの方が、「経験がプラスになった」「刺激を受けた」「やりがいを感じた」と回答し、

学校での文化体験プログラムが自身の活動の糧になっていることもわかった。このような結果から、文化体験プログラムが学校と専門家等の双方にとって有益な活動になっていることを見て取ることができる。他方こうした活動をさらに広げていく上で、提供側、学校等の受け手側、そして両者をつなぐコーディネーターのそれぞれに対する課題も指摘された。

私たちが大切にしなければならないのは、なによりも学校での子どもたちの学びの質を豊かにしていくことである。そのために地域と連携した学校での文化体験プログラムをどのように活用していくのかをさらに探求していく必要がある。このプログラムを発展させていくためには、本報告書にもあるように資金、時間、人、内容、制度等の様々な課題があるが、学校での子どもの学びの質を豊かにそして高度にしていくという視点に立って、地域、学校、行政等の各方面からの一層のご協力やご尽力を求めたい。

VII 資料



平成23年度文化体験パートナーシップ活動推進事業

みえの子どもたちに“感動”体験を！

プログラム提供機関・ 講師向けアンケート調査

調査のご協力をお願い

三重県生涯学習センターでは、子どもたちにすぐれた文化・芸術との「出会い」を提供し、創造力やコミュニケーション力の育成をめざして、文化体験パートナーシップ活動推進事業を実施しています。

学校における文化体験活動が、学校や子どもたちだけでなく、地域のアーティストや専門家にとっても有益なものとなることを目指し、平成23年度にプログラムをご提供いただいた講師・指導者の皆様のご意見を参考にさせていただきたく、調査を実施します。

ご多忙のところ誠に申し訳ございませんが、ご協力くださいますようお願いいたします。

ご記入に際してのお願い

- ・ご記入にあたっては、学校での文化体験活動において講師、指導者として携われた方がお答えください。
- ・三重県生涯学習センターのコーディネート機能について今後の参考にさせていただくために、【問1】では、三重県生涯学習センター以外の事例についてお答えください。
- ・設問によっては、選択式、自由記述式でお答えいただく場合がございますので、各設問をよくお読みください。
- ・このアンケート調査についてのお問い合わせは、下記へお願いします。

三重県生涯学習センター 電話番号 059-233-1150
ファクス 059-233-1155
e-mail jisedai-taiken@center-mie.or.jp
(担当 藤森・生田)

ご回答者様の所属機関・団体、およびお名前を記入ください。

所属機関・団体	
お名前	

三重県生涯学習センターの事業と比較するために、その他の学校向け文化・芸術体験活動について伺います。

【問1】 三重県生涯学習センター以外から学校への出向依頼はありましたか？

- a. なかった b. あった

【問1-2】その依頼は、どこからですか？

- a. 学校から直接 b. 所属団体や所属機関 c. 教育委員会
- d. 生涯学習センターのような中間支援機関
- e. その他

【問1-3】その際に謝金等は支払われましたか？（学校によって異なる場合は、複数チェックしてください）

- a. なし b. 交通費や材料費など必要経費のみ
- c. あった

【問1-4】三重県生涯学習センターがコーディネートした場合と比べて、よかった点、またはとまどった点がありますか？

a. よかった点

b. とまどった点

三重県生涯学習センターがコーディネートした体験プログラムについて伺います。

【問2】 体験プログラムのねらいとして特に大事にされていることは何ですか？
(3つ以内でお答えください)

- a. 子どもたちが文化・芸術の楽しさを体験する
- b. 子どもたちの創造力やコミュニケーション力を育む
- c. 子どもたちが表現する楽しさや喜びを実感できる
- d. 子どもたちが一つのことをみんなで成し遂げる達成感を感じる
- e. 子どもたちの学校生活に変化をつける
- f. 授業カリキュラムが充実する
- g. 子どもたちが文化・芸術に関連する職業などに興味をもつ
- h. 子どもたちの個性や能力を発見したり理解したりする機会となる
- i. その他（具体的に）

【問3】 子どもとの接し方や、進め方などで工夫したことはありますか？

- a. ない
- b. ある（下欄に具体的に記入してください）

プログラム内容

子どもとの接し方

【問7】 三重県生涯学習センターのコーディネーターがきっかけとなって、その後学校と独自で展開された事例などがあればご記入下さい。

学校 年 月 日

【問8】 コーディネーター（三重県生涯学習センター職員）に期待することやご要望、ご意見など自由にお書きください。

【問9】 体験プログラムへのご要望、ご意見などご自由にお書きください。

アンケートにご協力いただき
ありがとうございました。



三重県生涯学習センター